

に苦痛に違ひない。誰か語學の出来る人が側にゐて、案内記を読んで教へて呉れるものが一緒だったら、どんなに樂に旅が出来たらうとも思へ、二人三人の旅だったら、嘸かし呑氣に旅を樂しむ事が出来るだらうと思ふ。これは誰でもさう思ふらしい。併し、數人で旅をすると、自然お互に寄りかゝつて、案内書を読む處か、誰か教へて呉れるだらうなどと、態度が皆あいまいになり、得る處は談笑の喜びだけで、その他の何ものでもなくなつてしまふ。苦勞を重ね、一人で案内書を読むうちに、その内容は自然自分のものになり、後世忘れる事の出来ない印象となつて永久に自分の内容になつてゐる。

友達と旅をした事もある。Aが買ひ物をする間は、ぼんやり待つてゐなければならぬ。旅先を急ぐ可き處を今度は自分が買物をするために、AもBもあくびをしながら待たねばならない。是は煩はしさの大なるもので、時間も三倍かかる。詰り一日の旅程の三分の一しか出来ない事になる。美術館見物にかゝる。AもBもCも興味を感ずる畫が各々違ふ場合もある。怎な時には各は互に待ち合はせねばならぬ。

最も一人旅の苦勞は、並大抵ではなかつた。發車せんとする汽車の席に外套を置いて、マークしておいて、一寸、プラットホームに出て、お菓子など買つてゐる間に外套は取られてしまつた事もあつた。それはミュンヘン驛で、是から、チエツコスロバキアのカールスバートに向ふ時の事であつた。時あたかも夏の季で、あちらは日本の秋風が身にしみる頃であつたので寒い思ひをした。但し、車中、乗り合せた伊太利人夫婦に、この話をしたら、その人の若妻が、シヨールを貸して呉れた如き艶かしい結果にもなつたのだ。

ブラーグでは驛前の安宿に入つたが、此の時、南京虫はゐないだらうねと、念をおして入つたにも不拘、南京虫を多數發見、宿の主人と、殆んど知らない獨乙語でけんかをせねばならないつらさも一人旅なればこそである。だが、後世、そんな印象は決して忘れるものではない。

ヴェニス滞在中も、一二日の豫定を一週間にし、ヴェニス中の寺、繪畫をすつかり見、十月一日のヴェニス市のゴンドラ大競争の盛大さを見る機会にぶつかつたのも、一人旅なればこそである。

およそ、人生の行路も一人旅の様なものであらう。一人で自分の仕事だけに取組んでゐる間は、煩はしさはななく、而も、何時も仕事に熱申出来る。この嬉しさは味はふ可きものだ。一人であると云ふ事を知る事は己の強さを信じ己の強さを養ふものであるかも知れない。

ポスタアとその環境

原 弘

ポスタアは今日までに種々な角度から研究されてゐるけれども、その研究に於て兎角ポスタア——特にシエレエ以後の所謂近代ポスタアの發達とその環境との關係に就いての考察が忘れられ勝ちである様に思はれる。

環境と云ふ言葉は漠然としてゐて當らないかも知れないが、僕が茲で云はうとするのは主としてポスタアの揭示される可き場所とその周囲の状態を指すのである。

ポスタアの發達が都會に於て特に顯著に見られたことは云ふまでもないが、その都會も夫々の國々に於て各々異つてゐることを忘れてはならない。都市としての形態の相違が如何にポスタアに影響するか——例へば、大ざつぱに外國のポスタアと日本のポスタアを比べて見てもよい。人はよく日本のポスタアの非ポスタア的なを非難し慨嘆しさへするけれども、それはあなたがち國民性の缺陷によるものでも、作家の無能の結果でも、印刷術の幼稚の故でもない様だ。即ち日本のポスタアは屋外の廣告媒體たり得べからざる様に餘儀なくされてゐるのだから仕方がない、と僕は思ふ。この國の都會の何處を歩いて、歐洲の都會の街の風景に僕等がよく見る様なリトファスゾイレ（廣告柱）は立つてゐないし、二十四シートのポスタアの中で煙草の廣告が何萬人の通行者に微笑を送つてゐる様なホオアデザイン（揭示板）を見かけることなど尙更ない。ポスタアとは街頭に貼付さる可きもの、と云ふ字義を此國ではポスタア自身が失つてゐるのである。だからせいふく良くてシヨウウンドウの中に収まるか、建物の奥深くで額様の中に入れられて一幅の觀賞畫と化してしまふのである。

併し僕等は日本の都會の建築的環境が變化しつゝあることを目のあたりに見てゐるし、近代的な都市計劃が遂行されてゐることも知つてゐる。だから日本のポスタアも何れは所謂街頭美術となつて都會を彩るであらうし、街のギャラリーとなつて大衆の觀賞にそなへられる様になるだらうとは思ふが、希くは都市美協會とか廣告取締當事者が、近代都市を性格付ける重要な要素である處の廣告を徒らに制限するのみでなく、適當な揭示場を積極的に設ける様にして貰ひ度いものである。それからポスタアが出来るのだから。